

**Gruber, Johann Gottfried**

**Sitten, Gebräuche und Kleidung der Russen in St. Petersburg, dargestellt in Gemälden mit Beschreibungen.**

Leipzig, Industrie Comptoir [1801—1803] (文献番号5—33)

Hiler p.399 Colas 1207

グルーバー著

ペテルスブルグのロシア人の風俗習慣と服装

18世紀末当時のペテルスブルグの市民生活を描いた本書は、ドイツの文学史家、グルーバー (Johann Gottfried Gruber 1774—1851) の解説とライプツィヒ生れの銅版画家で、挿絵画家のガイスラー (Christian Gottfried Heinrich Geißler 1770—1844) の挿絵によっている。

1801年から1803年にかけてライプツィヒで出版されたようだが、1803年頃の出版物、8冊をひとつにまとめてある。ロシア人の風俗、習慣と服装を描いた手彩色銅版画40枚に、フランス語とドイツ語のキャプションが記述されている。序文によると、次のような出版の主旨の概要が汲みとられる。

人間にとって最も本質的な学問は、人間についての学問であるといわれるように、それはいつの時代にもあてはまることである。また、それが最も興味深い学問であると、付け加えることもできるだろう。この点を確信するには、旅行家 (冒険家) の例をみれば十分である。急流に乗って移動したわれわれの祖先の旅行であれ、冒険家の旅行であれ、教会参事会の規約に従って、イタリアへの旅行を余儀なくされたドイツ人の修道僧の旅行であれ、またどのような旅行であれ、手記を読んでみると、その作者 (旅行者) がどんなにか喜びをもって、旅行した土地の人々の特徴、風俗習慣、文化または野蛮さの程度といったものを学んだかを知ることができるからである。そして、他国の人々の性格や習慣を知るには、決して無関心であってはいけない。家を離れたことがない人々は、特に旅行関係のことに深い印象を受け、それが人間についての問題に及ぶと、彼らの顔に生き生きとした喜びの感情が表われる。このような傾向は、常にわれわれの心に顕著に存在している。

見聞の喜びを高め、知識を増やすため、画家、版画家、作家の間に競争心が芽生え、続編はだんだんと良いものになり、望ましい目的に近づいていく。自然誌における場合と同様、このような芸術家たちの助けは作家にとってとても必要で、むしろ一層不可欠である。なぜなら、絵で見ることは、明瞭で正確な記述よりも、物に対して一層正確な概念をもつのに貢献できるからである。

この作品の少し以前に、『中国人の風俗習慣と服装』という題の出版物が刊行されたが、この種の出版物の中では目立っていた。その作品と比較できるものも少なく、その作品を見劣りさせるような他の作品も殆どなかった。出版社は、その作品の博した好評に勇気づけられ、人々は、殆どまだ知られていない国のさまじまなことについて、多くの興味と関心をもって

るのだと納得したのだった。そして、喜んでガイスラー氏が次の出版計画を実施するのに尽力した。

ガイスラー氏はとても才能のある芸術家で、彼はロシアで数年を過ごしたことがあるが、1793年の旅行でのペテルスブルグ滞在中、楽しんで行商人、小売人や変わった人々を描いた。ガイスラー氏は、文明というものが、どのような国においても上流階級の人々だけを作り出すものだということをよく知っており、ロシアの下層社会については、殆んど知っている人がいないと気づいたので、それらの描写を出版して、国民的個性のいくつかの特徴を知らせようとした。そしてこの試みはまた、彼の財布を豊かなものにした。ガイスラー氏の目的をよりよく達成し、また、この作品を余り高価なものとしないうために、彼は、それぞれの図版の中に、いく人かの人物を区分けして描き込み、量的にも豊かなものにした。これらの人物の殆んどは、その特徴をとてもよく表わしているように思われる。私は、この作品の文学的な部分を受け持った。今まで、最大の関心を持って、さまざまな状況下の人々、いろいろな習慣をもつ同胞を見てきた。それが結果として、うわべだけの旅行者なら見逃したようなもの、また、仲のよい人々の間でしか行われなようなことを表現することにつながったと思う。

これらの作品は、同数の銅版画とフランス語、ドイツ語による解説によって構成された形式で製本し、出版にあたっては廉価にするように努めた。

図38は「古物商」である。ペテルスブルグのような都市には、たくさんの男女がおり、誰が古物商で生計をたてているのか、推測することができる。次のような特徴があった——それぞれが普通の人であり、物を売りがあって、品物は自分で古着市へ運んだ。買手もまた、彼らがじきに姿を現わすのを待っていた。日常の古着商はほとんど適当な露店を持たなかったの



で、路上で現金の受け渡しをしていたのだろう。図版の古物商の女は、全て色とりどりの祭礼服を着て現われ、無傷の士官の制服や唯一の貴重品を売っている。同じく立っている新兵は、一足のまだはげそうな長靴が気に入っているようだ。

(佐藤 <俊>)